

研究報告) 教員と学生の協働によるヘアショープロジェクト ー卒業式ヘアショー2024再開ー

A collaborative hair show project between faculty and students

- Graduation Ceremony Hair Show 2024 Resumes -

阿部高広¹⁾ 石川文子¹⁾ 酒井朋恵¹⁾ 佐野晴澄²⁾

抄 録

2025年3月に本学で行われた卒業式の式典終了後に卒業生に向けた「シークレットヘアショー」を実施した。2024年度の学生による学苑祭ヘアショーに誘発されるように企画、立案されたものである。そのヘアショーは従来とは異なり、教員が主体となって作品の制作や準備を行い、1年次生にサポートに入ってもらった。本研究報告は、今までなかなか実施されてこなかった教員主体のヘアショーを、卒業式という晴れやかな機会に行うまでの取り組みの記録と実施効果および課題を検討したものである。

キーワード：山野美容芸術短期大学 ヘアショー 芸術 教員と学生の協働

I. はじめに

山野美容芸術短期大学は1992年（平成4年）に日本で初めての美容教育のための短期大学として開学した。2024年度には、第32回目の学位記授与・卒業式が挙行された。2年間美容について様々な角度から学んできた学生自身が、「短期大学士」としての学位記を受ける“ハレの日”である。そのため、自己表現の場としてそれぞれが華やかな装いで参加する。¹⁾

1998年から本学では、学苑祭や新入生歓迎の際に、学生の創作活動を発表する場として、学生主体によるヘアショーが行われてきた。2001年頃からは、卒業式の式典終了後にも実施されるようになった。それまでのヘアショーの実施目的は、各学生の創作活動を発表する場であったが、卒業式は、1年次生が先輩である卒業生に向けた、先輩への感謝やこれからは自分たちが先輩の後を引き継いでいくという意思表示を目的としていたことが、ヘアショーのテーマからうかがえる。しかし、2018年まで開催されていた卒業式ヘアショーも、新型コロナウイルスによる影響を受けて、2019年度の卒業式ヘアショーは、準備途中での中止を余儀なくされた。以降、2023年度までの5年間、卒業式ヘアショーは途絶えたまま、再開されることはなかった。²⁾

以上のような状況から、今回の研究については「山野研究紀要」Vol.30「コロナ禍でのヘアショーと教員の関わり方の検討ー美容動画プロジェクトー」³⁾から発展させることを目的のひとつとした。課外活動であるヘアショーにおける学生に対する教員の関わり方を記録するとともに、実施効果および課題を挙げながら検討していく。

II. 実施の経緯とテーマ

先にも述べたように、コロナ禍により中断した本学のヘアショーは、2021年学苑祭で「美容動画プロジェクト」として再開し、翌2022年からは学苑祭の対面再開とともに、学内ホールでの実施が再開された。再開後からは、ヘアショーを通して伝えたいメッセージとストーリー性を中心とした構成となるように、プロデューサーたち幹部学生が、回を重ねるごとにまとめてきた。中でも3回目となった2024年度の学苑祭テーマの「君たちはどう生きるか」は、世界を取り巻く環境問題や社会問題を取り上げ、現状と今後の可能性を示しながら、この問題に対してどのように向き合うのか、観客に考えてもらう機会を美容で表現することが狙いだった。³⁾ そのヘアショーの完成を見届けた教員から自然発生したように、卒業式でのヘアショーを復活させ、学生の問いへ応えたい、表現する機会を設けたいという意見が挙がった。こうしたことを受けた教員によるヘアショー企画は、これから社会に出る卒業生に、美容の先輩として何かメッセージを伝えら

1) 教員：Takahiro Abe, Ayako Ishikawa, Tomoe Sakai,

2) 学生：Hazumi Sano

山野美容芸術短期大学

連絡先：〒192-0396 東京都八王子市鍵水 530

れたらという思いと学生から刺激を受けた形で始まった。

最初に、ショーのイメージを話し合い、以下の4点を共有していった。

- ①卒業式というハレの日のため、優雅な祝福のステージとなること。
- ②卒業生には開始直前まで伏せておき、サプライズとなる演出をすること。
- ③3人が舞台上で仕上がった際には、クリエイティブすぎることなく、サロンスタイルの白を基調としたベースに華やかさを加えること。
- ④スタイルチェンジ、もしくは技術を見せることにより、卒業生へ美容を通して変わっていった学生生活への回想とこれから変わるであろう新生活への応援の意味を込めること。

そして、この共有したイメージからショーのテーマを「ALETEAR～はばたく～」とした。

III. 各コンセプトと作品紹介

阿部) ショーコンセプトは

「フレッシュ+躍動感+現場技術」 (写真①)

コンセプトを表現するために、事前の仕込みとして衣装制作、メイクアップを施しフロントカット、ヘアセットはステージ上で行なった。また、ヘアショーを通じて、技術だけではなく3つのメッセージを込めた。

- ①指導者としてではなくいちアーティストとしての姿を見てもらい、卒業生・在学生全体の美容芸術へのモチベーションを高める。
- ②美容は単なる外見の変化ではなく、人の内面を躍動させ、将来への希望が広がっていくことを、ステージ上のエネルギーを通して体感してもらう。
- ③基本を疎かにせず、技術を磨き続けることの大切さ。

3つの観点を通して、「君たちはどう生きるか」の問いに答える作品を制作した。(写真①, 写真⑤)

〔ヘア〕 フロントはシースルーバンングでトレンド感を取り入れた。全体のシルエットとして高めのスタイルで若々しさと活発的なフレッシュな印象に仕上げた。またヘアアクセサリーには羽をモチーフに羽ばたく姿を表現した。

〔メイク〕 ピンク系でフェミニン・女性らしい優しい雰囲気を演出した。また、明るく幸福感のある印象を与える肌作りを施した。

〔衣裳〕 ミニドレス、キュートな印象を与え、軽やかに見えるようシルエットを調整した。バックの大きなリボンで「繋がり」を表現した。



写真① 阿部作成モデル

酒井) ショーコンセプトは

「巣立ち+多様性+自己信頼」 (写真②)

色味の無い全身ブラックでの登場から、ステージ上でのヘア施術と舞台転換での衣装チェンジによって、無の状態から純白になり、そして様々な色を纏って、それぞれが自分の色(個性)を持って未来に向かって旅立って欲しいという願いを込めて、コンセプトを表現した。

〔ヘア〕 地毛の黒髪で艶やかな髷を作り品格を表現し、淡いカラフルな様々な付け毛で多様性と滑らかさと気品、羽ばたいていく流れを表現した。ビジュアールと羽根を使って柔らかさと輝きをプラスした。

〔メイク〕 モデルの良さを残し、作り込み過ぎず、しかしステージ上で美しく映えるよう、凛とした意志を表現するために目にポイントを置いて、カールを緩くした長い付け睫毛にシルバーラメで切れ長なラインを引いた。ヘアからの流れで調和するように淡いパステルカラーでペイントを施した。

〔衣裳〕 ステージ上でスポットを浴びて美しく輝いて見えるよう、ラメ生地の上に10,000粒以上のラインストーンやスパンコールを施し、立体的に見えるよう流れる花ビラのような装飾も施した。「この先も自由に羽ばたいていけるように」と願いを込めて、不死鳥のように長い尾羽をたくさん作り、ボリュームが出るよう重ねて、動いた時に柔らかくフワツとなびくように施した。



写真② 酒井作成モデル

石川) ショーコンセプトは
「モダンレトロ+変化+文化」 (写真③、④)

黒と白という2スタイルの全く違う仕上がりにしたものを1人のモデルで表現するで、変化をわかりやすく表すこととした。

第一スタイル...黒をベースとして和を取り入れ、クールなフェミニンさを表す作品とした。(写真③)

〔ヘア〕 羽織の和素材と合皮のクールな印象に合うように鬘をイメージさせるシニョンを組み合わせたモヒカンスタイルに、カールした毛束を地毛と白のつけ毛をアクセントで入れて、ツヤと動きをつけた。

〔メイク〕 強さと華やかさを表すために、ブラックシルバーのアイメイクと真っ赤なリップを使用した。

〔衣裳〕 黒の羽織をメインに黒のミニスカートを身につけ、ウエストをコルセットタイプの合皮の太いベルトで締めて、合皮のニーハイブーツを合わせることで、学生時代の活発さとクールな印象を表現した。また、羽織という和の素材を用いることで、本学で学んだ着装技術と日本文化を想像するシルエットに仕上げた。

第二スタイル...白を基調として、1920年代の縛り付けていたものからの解放を表すシルエットの変化が、学生から社会人としての変化を連想させるスタイルとして取り入れた。(写真④)

〔ヘア〕 金髪で毛先をカールさせたボブスタイルで、髪色とシルエットを大きく変化させた。1920年に流行したボブスタイルは自由で活動的な当時の女性を象徴するスタイルであり、文化的な意味と連想するイメージを卒業後に活躍する学生たちと重ね合わせて表現した。

〔メイク〕 第一スタイルの目元にゴールドと、腕には煌めきをプラスして、しなやかな強さと衣装のきらめきに合わせた華やかさがにじみ出るように変化させた。

〔衣裳〕 ボディラインを出さない白とシルバースパンコール・フリンジの付いたドレスにファーを合わせて、第一スタイルから変化した成熟した華やかさを表した。



写真③ 石川作成モデル（第一スタイル）



写真④ 石川作成モデル（第二スタイル）

IV. 学生との協働

今回のヘアショーでは、モデル、音響操作・照明・技術ヘルプを1年次の学生に担ってもらうこととした。モデルは各教員のミューズとなる学生に依頼した。また音響に関しては、ショーの中で使用する音響・映像の選曲や編集を教員の阿部が行い、ショーの際の音響操作とともにホール内を映すカメラ操作を学生に任せた。照明は、これまでのショーで経験がある学生に依頼した。活動初期の時点で、オープニングに使う映像とショーの各場面に合わせた曲を編集し、学生にはまず、イメージしているショーのコンセプトを音から捉えてもらった。モデルと照明の学生には、感じたイメージから得た表現方法を、まずは各学生自身に委ねることとした。その後、学生の感じたイメージへのアドバイスをしながら、教員とイメージをすり合わせていく形をとった。

映像演出（阿部）

2024年度の学苑祭ヘアショーでは、最後のチームがAIを表現したため、ショーのその先であることを表現するために、冒頭の動画はAIを彷彿とさせる演出でスタートした。続いて、非日常的な雰囲気を演出するため、会場に緊張感を印象づけることを狙い、スモークが漂うモノトーンを基調とした映像にした。

（画像①）学内の映像部分のみカラー（画像②）にすることで、視覚に刺激を与え、単調にならないように工夫した。また撮影アングルはドローンで撮影した映像を使用することで、日常と非日常を掛け合わせた作品となることを目指した。



画像①



画像②

選曲編集（阿部）

冒頭はテクノ調の曲を選択し、冒頭の動画と繋がるようにした。また、モデルの力強さと静寂さを表現するため重低音と曲調に変化が多いものを使用した。

技術パートでは、アップテンポの曲を選択し、あえて会場を煽るような演出を取り入れて、エンターテインメント要素を取り入れることにより、技術を見せるだけではなく、会場全体が引き込まれるような工夫をした。

モデルのウォーキング部分では、自分たちの表現を大切にする文化からヒップホップをベースに音と光と動きがマッチするようにと考えた。また、ピアノの音がアクセントで入ることにより、ドレススタイルの雰囲気にも合わせた選曲とした。

照明（佐野）

照明は佐野を中心として、次のようにイメージをとらえて、アイデアを挙げて照明演出を表現した。

「衣装のデザインや曲調、技術パートの雰囲気、演者の表情に合わせて当て方や色を工夫した。1人目のモデル登場シーンでは、勢いのあるウォーキングとポーズが印象的だったため、あえてスポットライトのみを使用し、モデルに視線が集中するようにして高揚感とインパクトを演出した。技術パートでは流行りのテンポの良い楽曲が多かったため、音楽に合わせて自由にカラフルな照明を使い、楽しくライブ感のある空間づくりを意識した。メインモデルが歩く場面では、観客に白いドレスの装飾やメイクの細部まで注目してもらえよう、スポットでピンポイントに照らし、曲調に合わせて品のある青い照明を使用した。退場シーンでは、夢の中で美しく消えていくような余韻を残すため、徐々にスポットを絞りながら終える演出を行った。」

V. 考察

今回の卒業式ヘアショーに関わった学生は、既にオープンキャンパスや前年度の学苑祭ヘアショーなどに関わったことがある学生であった。そのため、ヘアショーがどのようなものであるか、モデルや音響・照明がどのようなことをするか、一定程度知識があることが想定される。そのような状況であったため、モデルや照明、ホールを映し出すカメラ操作に関して、学生のアイデアをほぼそのまま取り入れつつ、そこに教員の意見や関わっている学生との意見交換をしながら行うことができた。このヘアショーは、学生の新たなイベントへの参加意欲（モチベーションの向上）やイベントを中心となって動かすスタッフの経験を重ねる場として、またイベントには表に立つ人と裏で支える人の双方がいなければ成り立たないなどの気づきを与える機会として、学生にとって有益であると考える。

今回の卒業式ヘアショーに関わった学生からも以下のアンケート結果が得られた。

「ヘアメイクの技術だけでなく、音響やカメラといった裏側の活動を知り、学ぶことができました。1年生の時に参加した学苑祭のヘアショーでは技術メインで行っていたので、裏側で支えてくれている人たちの大変さなども知ることができました。」

「先生方の技術を間近で見ることができたので、普段授業では見れない応用したものだったり、アイデアの出し方なども知ることができたので、技術面でも学べるが多かったです。」

「ヘアショーなどでもヘアメイクだけでなく、全体の構成を見て考える癖をつけることができるようになりました。」

「モデルとして参加するにあたり、ただ歩くだけではなく、「作品の一部である」という意識を常に持つことを心掛けました。特に、綺麗に歩くことや姿勢を意識すること、そして作品の世界観を壊さない立ち振る舞いを大切にしました。」

「扇子の開き方や世界観に合わせたボージングなど、細部までこだわることの大切さを学びました。」

「先生方の技術や本番までの準備過程を間近で見ることができ、プロとしての姿勢や責任感を学ぶことができました。技術だけでなく、作品に対する想いの強さも伝わり、自分自身のモチベーション向上にもつながりました。」

授業では、教員の作品制作の過程をトータルで見せることはない。授業内では見ることもない教員のヘアメイク技術や作品制作に取り組む姿勢を直に、リアルタイムで見る機会となり、次のイベントでの取り組み方や制作の参考として、影響を与える機会になったことがアンケートからもわかる。

また、今回のヘアショーを通して、技術面では、ヘアセット剤の選択や使用方法、使用量によってどのような仕上がりになるか、ヘアパーツは仕上げたいイメージによって、材料や整髪料、作り方を選択するなど、実践する中で見せることができた。そのほかにも、メイクは舞台上で映えるための仕上がりを意識しながら、どのようにして仕上げていくのか、衣装は舞台上でスポットを当てた時の見せ方を考えて、素材や形を選ぶことやどのように使用することで、ウォーキングするモデルを美しく見せられるかなどを感じてもらった機会となった。こうしたことから、ヘアショー以後は、授業以外での作品制作の相談や技術指導への相談などが増えた。自ら、やりたいこと、知りたいこと、上手くできないことなどを見つけて、積極的に行動することがモチベーションアップにつながり、意欲的になったと考えられる。

今回のプロジェクトの取り組み方からは、教員としての気づきが多くあった。各担当とコミュニケーションを図り、信頼して任せることで、それぞれの担当学生は力を発揮してくれた。協働をしていく中で、はじめは教員に対して遠慮があるような様子や言われたことをやろうといった受動的な態度であったが、教員が信頼して任せただけで、作品を通して何を伝え、どのように見せたいのかしっかりと意見交換をすることで、学生自ら考え、学生一人一人の主体性を引き出し、やりがいにも繋がった。しかし、今後も協働を継続するためには、課題も考えられる。学生を信頼して任せる内容は、各学生のこれまでの経験や知識によって、常に変化する。その点を見極め、時には教員が指導する必要性を説くことが、学生の主体性を引き出し、やりがいにつながることもある。そうしたスキルを持つために、不断の努力と寄り添う心を教員も持ち続ける必要がある。

この協働による気づきを学生と教員双方で活かしていけるように、継続した学生支援を進めたいと考えている。

謝辞

今回のヘアショーに関わったすべての学生およびすべての教職員に感謝申し上げます。

利益相反の有無

なし

参考文献

- 1) 山本恵子他, 山野美容芸術短期大学 2023 年度卒業生におけるヘアスタイル考察「山野研究紀要」32 号 2024, P19-25
- 2) 古川千夏, ヘアショー2024 チーム, 阿部高広, ヘアショー2024「君たちはどう生きるか」—学生の挑戦と学び—, 「山野研究紀要」32 号 2024, P27-35
- 3) 阿部高広, 山本恵子, 石川文子著 コロナ禍でのヘアショーと教員のかかわり方の検討—美容動画プロジェクト—「山野研究紀要」30 号 2022 p 33-38

A collaborative hair show project between faculty and students

- Graduation Ceremony Hair Show 2024 Resumes -



写真⑤



写真⑥



写真⑦



写真⑧



写真⑨



写真⑩